

# ほんばこ



愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2019



夏服から冬服への衣替えの時期となりましたが皆さんいかがお過ごしでしょうか。急激な気温の変化によって風邪をひいてしまう人も増えてきています。体調管理をしっかりと、元気に学校を送りましょう。

10月かんをづき しぐれづき はつしもづき(神無月、時雨月、初霜月)

＊＊二十四節気＊＊

かんろ 寒露 8日

露が冷たく感じられる頃のことです。空気が澄み、夜空がさざえと月が明るむ季節です。

そうこう 霜降 24日

朝夕にぐっと冷え込み、霜が降りる頃です。山野の景が鮮やかに色づきます。

## 図書委員からお薦めの本

『ヒマラヤに学校をつくる』 吉岡 大祐 著 旬報社

この本には、著者の吉岡大祐さんが実際に体験した出来事が書かれている。彼は若いころにネパールに行き、生きていくために子供を売ったり、幼い子や私たちと同年齢ぐらいの人が働いたりしているような究極の貧困さを目のあたりにする。彼はそれらから脱するために、「教育」という形で子供たちを支援したいと考え、様々な困難に会いながらも「クラーク記念ヒマラヤ小学校」を開校する。

国際問題である貧困問題について興味のある方にはぜひ読んでほしい一冊です。

(2年生男子)

## 読書週間が10月27日から始まっています。

終戦まもない1947年(昭和22)年、まだ戦火の傷痕が至るところに残っているなかで「読書の力によって、平和な文化国家を作ろう」という決意のもと、出版社・取次会社・書店と公共図書館、そして新聞・放送のマスコミ機関も加わって、11月17日から、第1回『読書週間』が開催されました。そのときの反響はすばらしく、翌年の第2回からは期間も10月27日～11月9日(文化の日を中心にした2週間)と定められ、この運動は全国に広がっていきました。

そして『読書週間』は、日本の国民的行事として定着し、日本は世界有数の「本を読む国民の国」になりました。

いま、電子メディアの発達によって、世界の情報伝達の流れは、大きく変容しようとしています。しかし、その使い手が人間であるかぎり、その本体の人間性を育て、かたちづくるのに、「本」が重要な役割を果たすことは変わりありません。

暮らしのスタイルに、人生設計のなかに、新しい感覚での「本とのつきあい方」をとりいれていきませんか。

『読書週間』が始まる10月27日が、「文字・活字文化の日」に制定されました。よりいっそうの盛りあがり、期待いたします。

(公益社団法人読書推進運動協議会「読書週間の歴史」より)

## 12月図書委員会主催 図書館読書会のお知らせ

- 1 日時・場所 令和元年12月9日(月)放課後 本校図書館にて
- 2 題材 坂口安吾『墮落論・続墮落論』

本校図書館に集団読書用テキストとして購入してあるので、事前に借り出して読んでみてください。各種文庫に入っているの、自分で買って読んでもかまいません。

### 坂口安吾を読もう 2

薦めてみる本(以下、自伝なのか虚構なのかわからないところがある。)

#### 『石の思い』昭和21年

坂口安吾の幼少期の回想。安吾は新潟の名家に生まれる。先祖は大変な富豪だったという。父親は代議士(国会議員)。安吾は十三人姉弟の十一番目である。父親とは疎遠であった。時折部屋に呼んで墨をすらせるだけの関係だった。母親は病弱だった。安吾は家にいつかず、小学校では悪いことをして遊び回り、中学(名門の新潟中学=旧制)では学校を休んで落第した。「私は『家』に怖れと憎しみを感じ、海と空と風の中にふるさとと愛を感じていた」とある。なお「石の思い」とは、中国の小説『紅樓夢』で石が悲願を持って人間になったことから、安吾が「オレは石のようだな」と思うことがあることからつけた題名のようなのだ。

#### 『風と光と二十の私と』昭和21年

安吾は名門県立中学校(旧制)で落第し東京の私立豊山(ぶざん)中学(真言宗の系列)に転校、大正の末年ころそこを卒業する。父親も亡くなり家は借金が残ったので、進学せず働くことに。世田谷の下北沢の小学校の分教場で代用教員をすることになった。(石川啄木なども代用教員をしていたことがある。)安吾は二十歳だった。当時について戦後回想した文章。あたりは竹藪と田畑だった。教員は主任を含めて5人。担当は5年生70人。安吾は同僚の教員や子どもたちを観察しつつ自分の生き方を考える。やがて安吾は教師をやめて仏教を学ぶために東洋大学印度哲学科に入学する。

#### 『勉強記』昭和14年

フィクション。安吾自身は仏教を学ぼうと東洋大学印度哲学科に入り悟りを開くため毎日4時間睡眠で勉強をし、ついに神経衰弱に陥る。その時期に材を取った小説だが、この小説はユーモア小説じたてになっている。震災後3年(大正の初年)、涅槃(ねはん)大学校印度哲学科に栗栖按吉(くりすあんきち)は悟りを求めて入学、梵語(ぼんご=サンスクリット語)と巴利語(パーリ語)の講義に熱心に出席した。やがて鞍馬六蔵先生という方にチベット語を教わる羽目に。だが、その先生は・・・また、高僧たちと交わり、竜海さんという絵描き志望の若い僧と知り合う。なにかしら感じる違和感。栗栖按吉はどうするだろうか。

#### 『二十一』昭和18年

安吾は坊主になるつもりで、睡眠4時間で頑張った。挙句に神経衰弱になった。外国語(サンスクリット語、パーリ語、チベット語、フランス語、ラテン語)を勉強することで神経衰弱を退治した、習った言葉はみんな忘れた、と書いている。

\*坂口安吾を薦めてみる理由: 1年で太宰治を学習するが、授業で扱った通り「生きていてすみません」の世界だ。ここから人生に対する懐疑が始まった場合、どのように克服すればいいのだろうか? 一つのルートが宮沢賢治である。吉本隆明は『悲劇の解説』の中で太宰から賢治へのルートを提示している。が、もう一つのルートが坂口安吾である。太宰と同じ戦後無頼派でも、根底に人間への信頼を持っていた安吾を、ここでは薦めてみているわけである。 (図書研修課Y)